

各関係機関長 様

高知県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について

病害虫発生予察特殊報第2号を送付します。

平成21年度病害虫発生予察特殊報第2号

1. 病 名 **メロン退緑黄化病**

2. 病原ウイルス ウリ類退緑黄化ウイルス Cucurbit chlorotic yellows virus ; CCYV

3. 発 生 作 物 メロン

4. 発生経過

平成21年10月、高知県内のタバココナジラミが発生している施設メロンほ場において、下位～中位葉を中心に葉が黄化する症状が確認された。農業技術センターにおける遺伝子診断により、病原ウイルスであるCCYVによるメロン退緑黄化病であることが確認された。本県での発生は、現在までのところメロンで約1haである。

5. 他県での発生

平成16年に熊本県、佐賀県、大分県、宮崎県のキュウリ、メロンにおいて葉の黄化症状が確認された。当初はタバココナジラミバイオタイプQの吸汁加害による異常症とされていたが、平成19年に(独)九州沖縄農業研究センターがクロステロウイルス科クリニウイルス属の新規ウイルスを検出し、本ウイルスがタバココナジラミによって媒介されることを確認したため、本症状がウイルス病であることが明らかとなった。

本病は、平成20年2月～3月に九州全県、同10月に埼玉県、同12月に愛媛県、群馬県、栃木県で確認され、特殊報が発表されている。

6. 病 徴

発病の初期には、葉に退緑小斑点が生じ、斑点が増加・癒合しながら黄化、拡大して斑状の黄化葉となる。症状が進展すると、葉脈部分を残して葉の全面が黄化する(図1～4)。

本病害による被害としては、メロンでは果実糖度の低下及び果実の肥大不良、ネットの発現不良など収量・品質に大きく影響を及ぼす。また、キュウリでは葉の黄化に加え、葉縁が下側に巻く症状となり、草勢が低下し収量が減少する。

7. 伝染方法

本ウイルスは、タバココナジラミバイオタイプQ及びバイオタイプBが媒介(半永続伝搬:ウイルス媒介能力が数時間から数日間持続される)することが確認されている。

また、経卵伝染、汁液伝染、土壌伝染および種子伝染はしないと考えられている。

8. 感染植物

現在までに感染が確認された作物は、キュウリ、メロン、スイカである。

また、雑草ではオランダミナグサ(図5:ナデシコ科)及びクワクサ(図6:クワ科)で感染が確認されている。

さらに、接種試験ではウリ科、ナス科、アカザ科など、広範な植物に感染することが確認されている。

9. 防除対策

- (1) 育苗期からの薬剤防除などにより苗から本圃へのタバコナジラミの持ち込みを防ぐとともに、スタークル粒剤などによる定植時処理など低密度時からの防除を徹底する。特に、定植直後の感染は大きな被害につながるため、この時期の対策を重視し、サンマイルフロアブルやベストガード水溶剤などで早めに防除する。なお防除の際はミツバチへの影響を考慮し、薬剤抵抗性発達回避のため同一系統薬剤の連用は避ける。
- (2) 施設開口部への防虫ネット(1mm目以下(0.4mm以下が望ましい))被覆、黄色粘着シートや近紫外線カットフィルムの利用など成虫の侵入防止と密度低下に努める。
- (3) タバコナジラミは多くの植物に寄生するので、ほ場内及び周辺の雑草は除去(播種、定植前から実施)する。また、施設内へは作物以外の植物を持ち込まない。
- (4) 発病株は伝染源となるため、発見次第直ちに抜き取り、ビニル袋などに入れて完全に枯死するまで密閉処理する。
- (5) 栽培終了時に施設を密閉してタバコナジラミを死滅させ、施設外への飛散を防止する。



図1: 株全体に発生した黄化(ハウスサイド部)



図2: 病徴の進展した黄化葉



図3: 黄化葉(左)と正常葉(右)



図4: 本病による異常果(著しい肥大不良)



図5: オランダミナグサ



図6: クワクサ